

図書館だより

1996. 1. 10

第17巻4号

通巻136号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

カレント・エッセイ④

灯

よ

斧 泰 彦

一条の灯りに命を救われたことがある。

たしか、敗戦の翌年ではなかったか。大雪のせいで札幌を夕方発つはずの列車が深夜になってやっと動き出したものの、のろのろ運転を続け、疲れ切った私は睡魔に襲われた。島松駅で降りなければならぬのに、気がついたときは恵庭に着いていた。午前3時過ぎ、駅舎に火の気はなかったから、中で夜明けを待つわけにいかず、駅前にはもちろんタクシーなどありはしない。外はなお吹雪いている。意を決して雪道を歩き出す。普段ならばはっきりしている道路が、真っ直ぐな曲がっているのか見分けがつかぬ。長靴に入った雪が解け、近道をしようとして用水路に落ちたこともあって、足が重い。

眠気も募る。もし、立ち止まるか座り込んでいたら、間違いなく凍えてあの世に直行してしまったことだろう。どこまで歩いたのか、もうダメかなと思った一瞬、目の前に黒々としたわらぶきの一軒家が現れ窓からかすかな灯りが洩れてきたのである。あの家では、だれか起きているはずだ。必死に雪を掻き分けた。近そうに見えながら、なかなかたどり着けない。くじけそうな気持ちと、何が何でもという思いが交錯する。小半時も奮闘したろうか。やっとのことで表戸をたたいた。

朝支度を始めていた優しい小母さんに事情を話すと、すぐストーブのそばに上げてくれ、ご主人を起こして、下着もろとも全身の着替えを用意してくれたのである。熱いみそ汁で生き返った。後日、小母さんが教えてくれたところでは、私はこの家の周りを何度も這い回っていたらしい。その度に吹きだまりに迷い込み、小川に落ちていたように、雪原のなかに痕跡を残していたという。

他人の家で、身ぐるみ着替えをさせてもらった

のは、ほかにもう1件。香港で総督の政治顧問をしていたハワードさんの自宅を訪ねようと急な坂道を歩いていたら、突然豪雨に遭い、ずぶ濡れになって駆け込んだ私を気の毒に思ったのか、夫人が有無をいわさずハワード氏の衣類を持ち出してきたとき。親切に感謝しながらも、サイズが合わないで人に出会わぬよう祈りつつ帰路を急いだ記憶がある。

話は飛ぶ。中国・北宋の詩人、^{こうていけん}黄庭堅の「黄幾復に寄す」という作品に、こんな句がある。

桃李春風 一杯の酒
江湖夜雨 十年の^{ともしび}灯

むかし、二人がまだ若かったころ、春風に吹かれながら、咲き誇るモモヤスモモの花のもとで酒を酌み交わしたものだ。以来、漂泊の人生を送る君と僕。故郷にそほ降る雨の夜に、あの日の灯は今もあのままにともっているのだろうか——ぐらいの意であろう。ありきたりの言葉を並べながら、さまざまな情景を思い描くことが可能だ。「灯」一字をとってみても、過去の灯か、現在の灯か、どちらにも取れそうであり、想像力をかきたててくれる。

そういえば、平安時代、大学寮の学生に、勉学のための灯油代として与えた奨学金のことを「^{ともしび}灯火」と呼んだ。『広辞苑』第4版で「大学」を引くと、いの一に「大学寮の略」とあって、現代の「大学」は二番目に示されている。小学館の『大辞泉』では、さすがに順序は逆転していた。時代とともに言葉は変わり、意味の重点も移っていく。

若いころ、本や辞書は私たちの道標であり、「希望の^ひ灯」であった。時は流れ日は移りゆくとも、いつまでも「希望の灯」であり続けてほしい。

(おの やすひこ 教養部教授・マスコミ論)

インドネシア通信(2)

山根 對助

第3報 1995年9月6日着信分 ：前号の続き

*珍商売・水をかける子供たちなど 新年度を目前にして、教官たちは多忙になり、研究会・勉強会が維持できなくなりましたので、8月21日、3泊4日でロンボク島へ行ってきました。この島はバリ島の隣りにある島ですが、みなさんはたぶん御存知ないでしょう。日本での知名度は比較になりませんから。観光客もほとんどが西洋人（イタリア人、オーストラリア人が多いそうです）で、日本人はホテルに3組ほどいたでしょうか。

すばらしい島でした。何より印象的であったのはその清潔さ。私が知るジャワの街々は、空気も汚れているし、道端はゴミの山、至る所にある汚い屋台にはみすばらしい身なりの男女が群れている。お馴染みの光景が展開しています。およそ近代都市としての品位にも格調にも欠けるところばかりですが、この島ではほとんどゴミを見かけませんでした。主要交通機関はポニーの曳く乗合馬車。空気も澄んでいます。また、昔から最も犯罪の少ない島として知られていたのだそうですが、今は他の島からの影響もあり、事件が起こることもあるということでした。

さて、この島から舟で30分あまりのところに珊瑚礁の海に浮かぶ小島ギリ3島が並んでいます。その一つギリ・アイルへ行ってきました。トップレスの女性が寝そべって見事な胸を誇示しているのを横目で見ながら、私も泳いだりして楽しんでの帰途……舟から降りますと、4、5人の子供がミネラル・ウォーターの瓶を持ってまとわりつくのです。どこでもそうなのですが、この国では大人も子供も近づいてくる者はすべて「金」目当てなので、「水を買ってくれ」ということかと思いましたが、どうもそれでもなさそうで、その水を「チャッ」と私の足に注ぐのです。サンダル履きの足は砂にまみれています。それを洗い流そうとするのです。それで幾らかというと、200 Rp（ルピア）、日本円で8円ほど。払ってやろうかと思いましたが、子供たちはどうも「おれに権利がある」と争っているらしく、それにどんどん数も増えてきそうなのでやめました。中の水はミネラル・ウォーターであるはずありませんね、そこに無尽蔵にある海水に違いありません。

それはそれ。もし、皆さんがバリ島へ行ってみ

ようかとお思いになるなら、その旅程の2日ほどをロンボクに割いてはいかがでしょうか。インドネシアにはこういう所もあったのかと私自身が感嘆しています。

たしかに、ロンボクは伝統芸能の豊かさという点では、バリに一歩も二歩も譲るでしょうが、私の印象では「最後の楽園」はバリ島ではない。ロンボク島こそその名にふさわしい。しかし、近年中に国際空港の開設や巨大ホテルの建設が予定されているのだそうで、やがてこの「楽園」も消えて行く運命にあります。残り時間1年か2年かというところでしょうか。

なお、私はツアーで申し込んだのですが、参加者は他になく、ロンボク人のガイドが日本語で説明してくれました。全くの独学だそうですが、語学の天才というのは、やはりいるのだと思うほど達者な日本語でした。

ここでは、少しマジメな事を書いてみましょう。
*デカイ顔をしている女たち 私の体験に限るのですが、この国の女たちは、かなり威張っているんじゃないかと私は感じています。例えば、わがゲスト・ハウスの大家の女房など、とにかくデカイ顔で敷地内を歩き廻っていますし、その娘、彼女は私がここに来てから女の子を出産しましたが、まあ何もしない女で、すべて子守の女中任せ、生んだのだからそれでいいでしょうとでも言いたいのか、一日中パジャマ姿でうろつきまわります。亭主は影が薄く、存在感がまるでありません。横からとやかく言う必要もない事です。

もう一つ。パジャジャラン大学日本学科の全教員24名のうち、男は9人しかいません。どうして男がそんなに少ないのかと申しますと、国立大学の教官の給料体系と関係がありそうです。ひどく低いのです。初任給が18万Rpぐらいといいますが、7,000円程度です。そのくせ社会的地位はそんなに低くはありません。その上、この大学は、バンドン工科大学、インドネシア大学に次いで全国第3の位置を占める名門大学です。体面を保つためにも、また一家を支えるためにも男の教員たちは、アルバイトに精を出さざるを得ないこととなります。アルバイトは主として私立学校で日本語を教えることです。つまり、大学教官の給与では「豊かな生活」ができないのです。日本の大学教員だって豊かというほどではないのですが、日本はたぶん世界最高の平等社会ですからね。別に

どうという事もあります。この国は貧富の差がますます拡大しているという印象を受けます。こういう社会では、一流の頭脳を持つ野心的な男にとって、大学の教官は魅力ある職種とは申せません。

一方、女は金持ちと結婚している教官が多いのです。生活の事など全然心配しなくてもよいのですね。例えばさきの中学生の子供の母親の教員ですが、先日3週間ほど日本に行ってきました。彼女は大学生の長女と一緒に「ホテル・ニュー大谷」(28,000円の部屋)に泊まり、毎日4,000円の寿司を食べ、「ディズニーランド」で40,000円使ったのだそうです。こういう人、少なくとも私のまわりにはいません。だいたい、畳を日本から運ばせるのですからね。ケタが違います。二人の1日の支払いは、じつに女中の2年分の給料に相当します。

何となく女のほうが「威張っている」感じを受けるのは、一つには生活を保障されている女には一級の知力を持つ者が多い事、また時間的にも経済的にも勉強に精励できる余裕がある事などによるものと思われます。

*それでも感動はする 『北の国から』の第17回目といっても、覚えていないでしょう。父五郎と正式に離婚した母の令子に対して冷たい態度をとっていた娘が、母が帰る汽車を追って川辺を走るシーンですが、女の教員は皆、泣きました。サメザメという感じで。私も貰い泣きで「鬼の目に涙」でしたが。感受性は豊かにあるのですね。

*意味をなさぬ言葉「汚職」 こういうタイトルをつけてみましたが、きっと「汚職のない国」と解されるでしょう。ところが正反対なのです。この国ではすべてが汚職で成り立っているから、特に汚職という言葉が必要がないという意味なのです。以下は事実を確認しての記述ではありません。2、3の伝聞と、私の観察による推論です。

あるインドネシア人は私の質問に答えて、次のように語りました。「警察官の給料が30万Rp(1万2,000円)ほど。それでは生活できないからワイロを取る。例えば、トバクの現場を押さえて、ながしかの金をまきあげてもみ消す。こういう事が日常的に行われており、合計だいたい50~60万Rpの月収を得る。このような余禄があるから警察官は豊かに暮らす事ができるので、志望者は多く選抜試験は厳しい。また試験に合格しただけでは警察官になれない。それは1次の関門に過ぎず、2次の関門とは人事権を握っている幹部に200~300万Rpのワイロを贈ることである。それだけの金を上納できるものはあまりいない。つまり一般庶民には警察官への門は閉ざされている。中には抜群の成績で1次試験だけで無事合格する者もいるが、そうして警察官になったとしても、

周りからのきびしいイジメにあって退職に追い込まれることになる。また、上納金(ワイロ)を出した者は、その元手を取り戻さなければならないので、先輩たちと同じことをくり返す」と。

同じような話を数人から聞きました。事は警察官だけではありません。官吏、つまり国税によって生活している者たちは、それぞれの部門で国民への奉仕という最大義務・崇高な責任を放擲し、国民を苦しめる業に専念している、それは下級官吏にとどまるものではない。たぶん国家権力の中枢をも犯している病弊に違いない、と私は観測しているのです。日本の構造汚職など、この国の「構造汚職」に比べれば兎戯の類いと言えるでしょう。

以下は私の仮説なのですが……権力者の権限のあり方について、アジアには中国型と日本型の2種があるのではないかと。中国型は、いわば無制限に拡張したそれであり、中国の歴史に現れた権力者はみなそのように見受けられます。簡単に言えば、権力者は何をしても許されるのです。これに対して、日本型はある種の制約が機能して、権力の無制限的行使を許さない。インドネシアは明らかに中国型です。昨年、私は「日本時代」には軍政だけあって民政はなかったと書きました。もしも数年間でも日本の民政があれば、この国の政府もその任の重要性を認識してかなり高額な給与を支給する必要を認めただろう。その結果、小学校の先生、駐在所の巡査、郵便局長など、末端の官吏はその廉潔・その識見ゆえに国民の信頼を得ることになっただろう、と私は思います。インドネシアもここまで来てしまうと、もはや事無く引き返すことはほぼ不可能、そもそも国造りの基本を誤ったのだと思うのです。

ここでの見聞や体験から、私が最も大事だと思う事は、ある民族、ある国家の「現在」は、その民族、その国家の「歴史」を抜け出すことは不可能なのではないかという事なのです。インドネシアは350年間オランダに支配されました。今もインドネシアの生活習慣にオランダの影が、中国系商人の影がちらつくのは、モデルがそれしかない事によると私は思っています。同じことを別の言葉で言えば、昔はオランダ人がインドネシア人を支配し、搾取しました。そのモデルは「伝統」として消える事なく、今はインドネシア人の一部分が大多数のインドネシア人の上に君臨し、支配を続けている。私はこの国の現状を憂えているのですが、もしもこの発言が政府に知れると、即刻「国外追放」になる、それは100%確かなことです。それにしても、日本のインドネシア研究者は、こんなこと疾うに承知しているのに、なぜ黙っているのでしょうか。きっと「日本国民」の事などどうでもよいのでしょう。(完)

(やまね たいすけ 教養部教授・日本文学)

- 地域財政論 中央集権と地方分権の財政・経済分析 大川政三 [ほか] 創成社 1994
- 高齢化社会はこうすれば支えられる 徹底解明 川上則道 あけび書房 1994
- イタリアの中小企業戦略 三田出版会 1994
- 緑の世界史 上・下 クライブ・ボンティング 石弘之、京都大学環境史研究会訳 朝日新聞社 1994
- 地方都市自立・分権への道 酒田哲 東洋経済新報社 1995
- 現代の二都物語 なぜシリコンバレーは復活し、ポストン・ルート128は沈んだか アナリー・サクセニアン 大前研一訳 講談社 1995
- 環境保護の夜明け アメリカの経験に学ぶ V.B. シュファー 内田正夫訳 日本経済評論社 1994
- 社会人よ、大学院へ行こう！ 価値ある挑戦 入学から修了までの成功ガイド 平賀富一 中経出版 1994
- 脱「国境」の経済学 産業立地と貿易の新理論 P. グルーマン 北村行伸 [ほか] 訳 東洋経済新報社 1994
- 廃棄物 童門冬二 につかん書房 1994
- 高齢社会と地方分権 スウェーデン発福社の主役は市町村 斎藤弥生、山井和則 ミネルヴァ書房 1994
- 幕末・明治期の国民国家形成と文化変容 西川長夫、松宮秀治編 新曜社 1995
- 村落・都市・宗教 実証的研究 川崎恵璋 法律文化社 1994
- 農林水産六法 平成7年度版 学陽書房 1995
- 中国・深圳経済特区 三井田圭右 改訂増補版 大明堂 1995
- 非営利組織のマーケティング戦略 自治体・大学・病院・公共機関のための新しい変化対応パラダイム フィリップ・コトラー 井関利明監訳 第一法規出版 1991
- 環境の経済学 マシュー・エデル 南部鶴彦訳 東洋経済新報社 1981
- 計量経済学 山本拓 新世社 1995
- 転換期の家族 —— ジェンダー・家族・開発 —— N.B. ライデンフロスト編 松島 千代野監修 家庭経営学会訳 日本家政学会発行 産業統計研究社 1995
- 新地方主義 分権時代の地方自治の展開 金子善次郎編 ぎょうせい 1994
- 国土と農村の計画 その史的展開 農林統計協会 1994
- 食料と環境の政策構想 矢口芳生 農林統計協会 1995
- 環境革命 1 (入門篇) 環境科学としての環境学 山田国広 藤原書店 1994
- 『資本論』を読む 上・下 浜林正夫 学習の友社 1994—1995
- 環境思想の系譜 東海大学出版会 1995
- 1 環境思想の出現
 - 2 環境思想と社会
 - 3 環境思想の多様な展開

気楽に読もう

インターネット・パソコン通信・マルチメディア関係新着図書

- インターネット何ができるかどう使うか 山名一郎 日本実業出版社 1995.6
- インターネットフロンティア 知野明 エーアイ出版 1994.9
- 手にとるようにインターネットがわかる本 NTTメディアスコープ 1995.3
- インターネット漂流記 吉田茂樹ほか オーム社 1994.6
- インターネット入門～世界を結ぶ情報ハイウェイ 永井武 株式会社富士通経営研修所 1994.7
- はじめてのインターネット 若林宏 株式会社秀和システム 1995.5
- インターネット・ビギナーズガイド トレイシー・ラクウエイ 中村正三郎監訳 株式会社トッパン 1995.2
- インターネット・クイック・リファレンス ポール・E. ホフマン 株式会社ジャストシステム 1994.7
- インターネットで情報検索 戸田慎一ほか 日外アソシエーツ 1994.11
- fjの歩き方～インターネットニュースグループの世界 fjの歩き方編集委員会編 オーム社 1995.5
- 初心者のためのインターネット B.P. キーホー 西田竹志訳 株式会社トッパン 1995.6

- 法廷傍聴へ行(い)こう 井上薫 法学書院 1995
- 世界の民族地図 高崎通浩 作品社 1994
- 日本国憲法を生んだ密室の九日間 鈴木昭典 創元社 1995
- 20世紀の戦争 三野正洋 [ほか] 朝日ソノラマ 1995
- 民法 1 内田貴 東京大学出版会 1994
- 建築法規入門 荒秀編 有斐閣 1995
- 契約法 水本浩 有斐閣 1995
- 判例消費者取引法 名古屋消費者問題研究会編 商事法務研究会 1992
- フランスの労働運動 暁闇のとき 佐藤香 新青出版 1995
- 刑法各論 25講 岡野光雄 成文堂 1995
- 犯罪論の現在と目的的行為論 井田良 成文堂 1995
- (新・)判例コンメンタール刑事訴訟法 1 高田卓爾、鈴木茂嗣編 三省堂 1995 総則
- 訴える側の株主代表訴訟 その論理と手続の実際 日興証券株主代表訴訟弁護団編 民事法研究会 1994
- ゼミナール会社法入門 岸田雅雄 2版 日本経済新聞社 1994
- 株主代表訴訟と取締役の責任 新谷勝 中央経済社 1994
- 株主代表訴訟問題と対応 ゼミナール 柏文夫 東洋経済新報社 1994
- 株主代表訴訟Q&A そこが知りたい! いま必要な事前・事後対策 平岡高志編 金融財政事情研究会 1993
- インターネット・ユーザーズガイド Ed Krol (エド クロール) 村井純訳 株式会社エディックス 1995.1
- 第三の開国～インターネットの衝撃 紀伊国屋書店 1994.10
- ハッピー・ネットワーク～新入生のためのインターネット入門 山本和彦 アスキー出版 1994.7
- 進化するネットワーク 会津泉 NTT出版 1994.7
- イラストで読むネットワーク入門 フランク・J. デラフレア、レス・フリード 鷺谷好輝訳 株式会社インプレス 1994.9
- 超かんたんパソコン通信 本谷裕二 明日香出版社 1994.8
- 会社法演習 2 株式会社(機関) 上柳克郎 [ほか]編 有斐閣 1983
- 民法の常識 石田喜久夫 有斐閣 1993
- ダイシーとデュギー 和田英夫 勁草書房 1994
- 会社法 商法講義 1 上柳克郎 [ほか]編 第4版 有斐閣 1994
- 会社法 商法講義 2 上柳克郎 [ほか]編 第4版 有斐閣 1994
- 会社法 商法講義 3 上柳克郎 [ほか]編 第4版 有斐閣 1994
- 弁護士会・北から南から 日本弁護士連合会編 法学書院 1995
- 幾山河 商法学者の思い出 鈴木竹雄 有斐閣 1993
- 法律用語対訳集 ロシア語編 法務省刑事局外国法令研究会編 商事法務研究会 1993
- 憲法と国連憲章 90年代のゆくえ 渡辺洋三 岩波書店 1993
- 民法総則講義 藤村和夫 第2版 成文堂 1993
- 法学 森泉章編 有斐閣 1993
- 日本国憲法の批判的研究 豊島典雄 共栄書房 1993
- 国際法講義 現状分析と新時代への展望 波多野里望、小川芳彦編 新版 有斐閣 1993
- 刑法要論 総論 大塚仁 第6版 成文堂 1993
- 刑法要論 各論 大塚仁 第6版 成文堂 1993
- パソコン通信のすべて 立川敬二ほか NTT出版 1995.6
- パソコンネットワーク イエローページ ネットサーファーズ・スタジオ 1995.6
- NIFTY-Serve パーフェクトガイド 池田冬彦 1993.12 初版 1995.5 改訂版
- コンピュータネットワークの基礎 富澤儀一 朝倉書店 1994.9
- マルチメディア革命 95 日経産業新聞 1995.4
- 最新マルチメディアが見える事典 河野光雄 オース出版 1994.10
- やさしいマルチメディア 佐藤登ほか 電気通信協会 オーム社発売 1995.4

曼陀羅図典 染川英輔図版 小峰弥彦 [ほか] 解説 大法
輪閣 1993
仏教ソメソポタミア起源説 R. パール 佐藤任訳 東方
出版 1995
An Introduction to Modern Japanese O. Mizutani N.
Mizutani The Japan Times 1977
日本の深層文化序説 三つの深層と宗教 津城寛文 玉川
大学出版部 1995
近世思想史研究の現在 衣笠安喜編 思文閣出版 1995
日本村落信仰論 赤田光男 雄山閣出版 1995
発達心理学辞典 岩田純一 [ほか] 編集 ミネルヴァ書房
1995
英語教授法辞典 小川芳男 [ほか] 編 新版 三省堂 1982
新英文法辞典 大塚高信編 改訂増補版 三省堂 1970
ギリシア神話 西欧文化の源流へ 丹羽隆子 大修館書店
1985
異文化理解とコミュニケーション 2 人間と組織 三修
社 1994 本名信行 [ほか] 編
ミステリアスな文化史 矢島文夫 中央公論社 1994
絵でみるシンボル辞典 水之江有一編 研究社出版 1986
中西進万葉集 第1巻 万葉集の比較文学的研究 上 中
西進 講談社 1995
アメリカ文化のいま 人種・ジェンダー・階級 小林憲二
ミネルヴァ書房 1995
衛生展覧会の欲望 田中聡 青弓社 1994

カラカウア王のニッポン仰天旅行記 ウイリアム・N. アー
ムストロング 荒俣宏訳・解説 小学館 1995
エビの向こうにアジアが見える 村井吉敬、鶴見良行編
学陽書房 1992
食材図典 Food's food 小学館 1995
基本漢字 500 Vol.2 加納千恵子 [ほか] 凡人社 1994
(概説) 日本語 北原保雄編 朝倉書店 1995
語学教師のための談話分析 マイケル・マッカーシー 安
藤貞雄、加藤克美訳 大修館書店 1995
方言と計量分析 市井外喜子 新典社 1993
国語の中に於ける漢語の研究 山田孝雄 宝文館出版
1958
語彙論研究 宮島達夫 むぎ書房 1994
アイヌ語をフィールドワークする ことばを訪ねて 中川
裕 大修館書店 1995
英国ユダヤ人 共生をめざした流転の民の苦闘 佐藤唯行
講談社 1995
サタン 初期キリスト教の伝統 J.B. ラッセル 野村美紀
子訳 教文館 1987
ルシファー 中世の悪魔 J.B. ラッセル 野村美紀子訳
教文館 1989
研究社新英和大辞典 小稲義男 [ほか] 編 第5版 研究
社 1982
研究社新和英大辞典 編集主幹：増田綱 第4版 研究社
1974

気楽に読もう

六千人の命のビザ

杉原幸子 著 (大正出版 1993.10
第3版：1994.10 発行)

第2次世界大戦の中で、一人の日本人がとった行動を、国外からも高く評価されている例は、きわめて少ない。

政府当局の意に反して、1940年8月にユダヤ難民にビザを発給して約6,000人の命を救済したリトアニア日本領事、杉原千畝(ちうね)氏(1900～1986)の行動は、リトアニア事件と言われ、そのため戦後は外務省を去った杉原であったが、海外からその英雄的博愛主義による功績が讃えら

れて波紋を呼んだ。

1991年9月、人道的功労者に与えられる「ウォーレンバーグ賞」が杉原千畝に与えられることが決定し、ニューヨークに幸子夫人と子息弘樹氏が招待された。

1993年4月には、難民救済などで世界的に実績のあるCBF(英国中央財団)の60周年ロンドン大会に杉原弘樹・美智夫妻が招待された。リトアニアでも、素晴らしい行為を記念するため「スギハラ通り」ができ、政府は工芸の盛んなお国柄を反映して、日本人杉原千畝をテーマにメダルのデザインを募集した。日本政府は1992年3月に、国会で正式に杉原千畝の名譽を回復した。8月には郷里岐阜県の八百津町に胸像が建立され、「人道の丘公園」がつくられた。

フラクタル・レイトレーシング 青山智夫 海文堂出版 1993
 フラクタルと数の世界 西沢清子 [ほか] 海文堂出版 1991
 統計数学入門 本間鶴千代 森北出版 1970
 情報教育の基礎 永田元康 [ほか] コロナ社 1995
 ソフトウェア設計 オブジェクト指向からエージェント指向へ 松本吉弘、大槻繁 朝倉書店 1995
 知の論理 小林康夫、船曳建夫編 東京大学出版会 1995 (実践) 数値電磁界解析法 坪井始、内藤督編 養賢堂 1995
 ペトリネットによる離散事象システム論 熊谷貞俊、藤田憲久 コロナ社 1995
 連続体力学の基礎 富田佳宏 養賢堂 1995
 文芸的プログラミング ドナルド・E.クヌース 有沢誠訳 アスキー 1994
 実態/ コンピュータウイルス——知ることから始めるウイルス対策—— 渡部章 カットシステム 1995
 波動と非線形問題 30 講 戸田盛和 朝倉書店 1995
 はじめてのゲーム理論 ゲーム理論と人間の繋がり 行方常幸、行方洋子 エフ・コピント・富士 1995
 木造建築耐風設計の考え方 日本建築学会編集 日本建築学会 1995
 木質構造設計基準・同解説 日本建築学会編集 第2版 日本建築学会 1995

ちからとかたち 構造入門教材 日本建築学会 1994
 古代住居のはなし 石野博信 吉川弘文館 1995
 建築法規入門 荒秀編 有斐閣 1995
 木造の詳細 1 構造編 彰国社編 新訂版 1994
 (わかりやすい) 建築設計図の見方・かき方 室岡克孝、渡部寿雄 オーム社 1995
 動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失 高橋太郎 むぎ書房 1994
 コンピューティング科学 川合慧 東京大学出版会 1995
 日本語発音アクセント辞典 NHK 編 改訂新版 日本放送出版協会 1985
 A級B型C++入門 堀江郁弥、望月うさぎ ソフトバンク 1995
 fjの歩き方 インターネットニュースグループの世界 fjの歩き方編集委員会編 オーム社 1995
 C++プログラム書法 Tom Cargill 吉村寿人訳 ソフトバンク出版事業部 1994
 錠と鍵の世界 その文化史とプラクティカル・テキスト 赤松征夫 彰国社 1995
 BSD on Windows 1.0 ユーザーズマニュアル 太田博志 アスキー 1995
 ペトリネットの基礎 奥川峻史 共立出版 1995
 舗装工学 土木学会土構造物および基礎委員会「舗装工学」編集委員会編集 土木学会 1995

また、高等学校の英語の教科書として、杉原千畝によるビザ発給ドキュメントの記述が、文部省検定に合格し、1994年度から使用されている。

新聞、雑誌、テレビ(運命を分けた一枚のビザ、知ってるつもり、徹子の部屋、ドラマ「命のビザ」)などマスコミでも取り上げられ、その英断が国内でも広く知られるところとなり、本書の著者、杉原幸子夫人は、ハリウッドからの映画化の話や記念行事への出席、取材や講演、執筆などの対応に多忙である。

現在、舞台となったリトアニアの元日本領事館の建物を買い取って保全し、記念館にすべく財団を設立し、募金活動をしているそうである。

分類 238.5 Su 34

(Y.Z)



杉原 千畝

(岩波講座) 認知科学 7 言語πのはなし 岩波書店 1995
 金田康正 東京図書 1991
 迷わず使える! 一太郎 ver.5 らくらく使う!! 最短入門ガイド 基本操作入門 高橋慈子 技術評論社 1993
 一太郎 ver.5 全機能 bible システムサイエンス研究所 技術評論社 1994
 学生のための性とエイズ 木村竜雄、皆川興栄 朝倉書店 1995
 (全集)世界の食料世界の農村 24 アジア漁業の発展と日本 漁業大国から国際連帯へ 広吉勝治[ほか] 農山漁村文化協会 1995
 経験と言語 黒田亘 東京大学出版会 1975
 知識と行為 黒田亘 東京大学出版会 1983
 英語数量表現辞典 富井篤編 三省堂 1995
 人間と文字 田中一光構成 平凡社 1995
 だれでも使えるインターネット パソコン通信でアクセス 橋本典明 工業調査会 1995
 岩波講座ソフトウェア科学 13 長尾真 [ほか] 編 岩波書店 1991
 プログラムの基礎理論
 トータル・ウォー 第二次世界大戦の原因と経過 上巻 西半球編 P.カルヴォコレッシー [ほか] 八木勇訳 河出書房新社 1993
 下巻 大東亜・太平洋戦争編
 (クロニク)世界全史 樺山紘一 [ほか] 編集 講談社 1994

第二次世界大戦歴史地図 タイムズ・アトラス ジョン・キーガン編 滝田毅監訳 原書房 1994
 第二次世界大戦 人類史上最大の事件 上・下巻 マーティン・ギルバート 岩崎俊夫訳 心交社 1994
 ゲーテ読本 山下肇他著訳 潮出版社 1982
 明治ニュース事典 第2巻 明治11年-明治15年 明治ニュース事典編纂委員会、毎日コミュニケーションズ出版部編集 毎日コミュニケーションズ 1983
 MOSAIC ハンドブック Macintosh版 Dale Dougherty, Richard Koman 共 エディックス訳 インターナショナル・トムソン・パブリッシング・ジャパン 1995
 インターネット情報検索ツールガイド Paul Gilster 小嶋隆一、高尾哲康共訳 オーム社 1995
 (図解で知る)クライアント/サーバーのしくみ バインス情報センター 技術評論社 1995
 ロープとリングの事件 レオ・ブルース 小林晋訳 国書刊行会 1995 (世界探偵小説全集 8)
 年貢を納めていた人々 西洋近世農民の暮し 坂井洲二 法政大学出版局 1995
 英国風の殺人 シリル・ヘアー 佐藤弓生訳 国書刊行会 1995
 中国の禁書 章培恒、安平秋主編 氷上正、松尾康憲訳 新潮社 1994
 近代日本の軌跡 5 太平洋戦争 吉川弘文館 1995 由井正臣編

気楽に読もう

金子みすゞ童謡集

「わたしと小鳥とすずと」(1984)

「明るいほうへ」(1995)

JULA 出版

秋の初めの頃、あるCMで鈴木保奈美さんがつぶやくように朗読していた詩があります。「星とたんぽぽ」というその詩の前半部分を紹介します。

青いお空のそこふかく、/海の小石のそのように、/夜がくるまでしずんで、/昼のお星はめにみえぬ。/見えぬけれどもあるんだよ、/見えぬものでもあるんだよ。

私が金子みすゞ(1903~30:明36~昭5)という童謡詩人を知るきっかけとなったのは、彼女の生涯とその作品を紹介した番組でした。みすゞは20歳からの5年間に約512篇の詩をつくり、26歳の若さでこの世を去りました。自ら命を絶った悲しい最期とはうらはらに、彼女の詩の世界はやさしく、あたたかく、そして天使のように清らかです。はじめに紹介した詩からも、そのことはわかると思います。私はみすゞの詩を読んでいる間、涙が止まりませんでした。彼女のやさしさが心の奥深くにまで染みこむようで、とても安らかな気持ちになりました。

没後60年以上経った今でも色褪せることのない金子みすゞの世界に、是非ふれてみて下さい。(C.N)

持続可能な新経済・社会システムへの転換と これからの地域開発政策

小田 清

すでに見てきたように、来るべき21世紀の経済・社会では、途上国の急激な生産拡大によって環境の悪化が不可避となる。また、急激な人口増加による食糧不足も懸念されている。したがって、これまでと同じような経済・社会システムを持続させ、経済成長を続行させるならば、先進国のみならず、これから成長しようとしている途上国の将来にとっても足かせとなり、南北問題をますます激化させることにもなる。

このような見方が正しいものとするならば、21世紀に構築すべき持続可能な経済・社会システムと地域開発政策の有り様にとって重要なことは、大量生産様式が生み出してきた「浪費社会のシステム」が唯一絶対的であるとの観点を離れ、厳しい現実を見据えながら、これまで軽視されてきた経済外的な側面を基本に含めて新しい可能性を探ることにあるといわなければならない。

その場合の大まかな基本線は、自国内で生産可能な食糧や生産・消費財は自国内生産を原則とすることに求められよう。そのことは結果的に広い意味で国際経済社会の発展に大きく貢献し、また、空洞化しつつある国内の地域産業を再構築することにもつながるのである。

今日、世界人口の増加による食糧需要増は、生産量の停滞により穀物価格を上昇させ、発展途上国では飢餓状態さえ生まれている。その原因となっている「農産物の自由化」の唱導は一部先進国での論理である。絶対的な食糧不足の到来に対しては「自由化（輸入）の論理」よりも「国際的で人道的な見地」が優先されてしかるべきであろう。

また、各国（先進国）の規制が及ばず、途上国を中心に低賃金を求め、環境コストを無視して展開している多国籍企業群の経済活動などは、持続可能な開発と環境保全との統合を目指す国際社会での協調要求の強まり、途上国の民族主義の高揚や民主主義の浸透などによっても制限されよう。

同時に、高度な技術水準の他国への移転は、それを国際的に平準化させ、多国籍企業の優位性を低下させる。今や、低コストに支えられた多国籍企業の活動は展開困難となり、方向転換を迫られることになる。そこでは、これまでの「原則」は修正され、環境・食糧問題などを内部化した「新しい経済・社会システム」の模索を余儀なくさせる。

このような転換要求は、従来の地域開発政策の在り方をも大きく変えることになる。すなわち、他の国・地域に環境問題や食糧問題を押し付けて形成されてきた「見せかけの繁栄」社会を、いかに持続可能な国民経済の方向に転換させるのかということである。換言するならば、「現在の豊かさよりも将来において不安のない地域をどのように創るか」ということが、21世紀において重要なポイントになるということである。その方向性は次のようなものである。

新視点での国土編成の基本は「大都市圏」の再検討であり、これまであまり重視されなかった「地域・地方」を新システムの視点から見直すことである。なぜならば、すでに東京を含む「大都市圏」は循環型経済社会を担う能力を失っており、「廃棄物」を含めての諸環境コストの負担は重くなるばかりである。これは日本全体の持続可能な開発と環境保全との統合にとって、かなり重い負担であり、このような意味からも、いびつなシステムを改訂する必要があるということである。

同時に、これまで効率化や産業構造の高度化をあまり期待されてこなかった地域を、新しい国土編成の中に新しいシステムの担い手として位置付けし、わが国の高い生産性や技術を利用しながら、できるだけ「地域内循環型」での経済・社会システムの確立を考えるということである。資源小国として21世紀を生き延びるためには、このような流れを定着させ、システムを転換させなければならないのである。

（こだ きよし 経済学部教授・開発政策論）

扉

コーニッシ箕子

NEDELE (日) PONDĚLÍ (月) ÚTERÝ (火)
 ……平成7年の私の日記カレンダーはチェコ製である。古都プラハの華やかさを秘めながら歴史の流れに洗みを加えて行った町の佇まいが、色調を抑えた写真で月々カレンダーを飾る。それは、数米毎に荘重に彫り込まれた聖者像に縁どられる15世紀のカレス橋であったり、幽気漂う旧ユダヤ人墓地であったりする。

生れ故郷のスロヴァキアまで車で連れて行って呉れる約束だった独逸人の友達に急に具合が悪くなって「済まないけど一人でいらっしやい、プラハだけでも、汽車だったらいくらかかからない。B&B (Bed and Breakfast 民宿：宿泊料に朝食が含まれている簡易旅館) は電話約束しておいてあげるから」と言うのだ。ミュンヘンから100k程東北のレーゲンスバーク駅からニュールンベルグ始発プラハ行きに乗せられた。国境では簡単な旅券の検査があり、隣席のチェコ人青年が親切に駅での乗継ぎの要領などを教えてくれた。森林地帯を抜けた乗継駅プルゼニユはピルゼンビールで有名な町だが、駅の片側には廃墟に近い工場が枠組は錆ついていた俣、可成りのスペースを取って威丈高に建っている。ゲートの大きな扉の赤いのがちぐはぐだった。

— 道に迷いもう暗くなって、私はその未知のB&Bを坂の上に訪ねあてた。プラハの秋は濃く、落葉に足をとられそうな長い前庭のつき当たりに立っている人影が手を振っているのが見えた。「遅いので心配しました。東洋の人を泊めるのは初めてよ」豊かな銀髪を黒ピロウドのリボンで纏め上げた品の良い老女は、私が同年輩なのを見届け、親しみのある口調で訛りの強い片言の英語を喋った。二階に案内され、その欄杆の木影や、軋む廊下に寄せてある大きな箆筒等で昔の裕福さが偲ばれる。

— 老女が重い木の扉を開ける時、私はグレーゴルがその陰に隠れているのではないかとの突嗟の幻想に襲われた。彼女が長いスカートを両手で抑えつまむ恰好は、丁度グレーゴルの母親がおそるおそる部屋に入る姿ではないか。

カフカ (Kafka, Franz, 1883~1924 ユダヤ系ドイツ語作家。オーストリア(当時)のプラハ生まれ) の「変身」の主人公の傷みが又一瞬私の心を駆け抜けた。部屋には勿論大きな翅虫は居なかった。

フランツ・カフカは、この石畳の多い小暗くて歴史の香気に充ちた町を愛した。プラハ城の内郭、黄金小路に彼が仕事場として半年程通ったという家がある。妹が良い作品が書けるようにと提供した由。ユダヤ人町の喧噪を避け肩で息をつきながら上って来たのであろう。扉は青く塗ってある。黄金や褐色が基調となる扉の佇まいにはそぐわない。カフカの隠喩、奇妙なユーモアを色に表わそうとしたのだろうか。勿論何の寓意もないかもしれないけれど—

二日目の夜、彼女が扉を叩いて入って来た。お茶をすゝめ、緑がかった瞳を優しく輝やかせて子供や孫の話をした。部屋の隅に古い布幕を垂らした本棚があった。内容を尋ねる私に、刺繍のある端を手繰り寄せ中棚からノートの束や本の一抱えを出してみせた。祖父の代からのものでいつかは整理しようと思っっていると意図であろう、英語ではなかった。少し沈んだ声になり、これは独逸語、これはチェコ語と説明しているのは判る。突然、「これ持って行っていい」と一冊の小型本を私に差し出した。甲殻の翅部をコッソソと叩かれた感じだった。彼女は本の説明はしてくれず、ノート等明日片付けるからと言って扉の向こうに消えた。堅牢な表紙は黄ばんでいるが、持ち主が読み込んだ感じだ。奥付け部分に流麗な文字で名前が書いてある。カフカの短篇集でもあるのかと胸が踊って来た。併し、よくみるとチェコ語である。カフカは独逸語で著した筈だ。

翌朝、宿を出る時銀髪の主は居ず、どこから来たのか大柄な美しい孫娘が表玄関に背を凭せかけ伸びやかに立っていた。唇で笑っている。グレーゴルの妹もあんな天使のような雰囲気があったのではなかったか。

レーゲンスバークには病気を押して友人が迎えに来て呉れていた。彼女は、「ああ、これ、ドストエフスキーの「貧しき人々」なのよ。でも、こんなに古い翻訳普及版がよくあったね」と懐しそくにページをめくった。

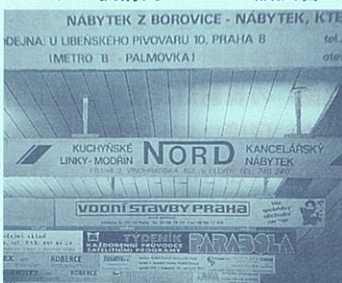
それにしても、緑色の目の老女は何故少し哀しくなったのであろう。何故「貧しき人々」を呉れたのであろう。

読めもしないその本を手にとると、扉の向うに去った緑の目とプラハが、有機体のように私を包む。

(コーニッシ せつこ 人文学部講師・英国文化論)

▶至プラハ城：カフカ縁の道

▼プラハ駅構内のチェコ語広告



《図書展示会 (No.22) : 古文書の解説》

展示期間：平成8年2月27日まで / 展示場所：図書館1F・展示コーナー

今回のテーマ：「**仏教・神道**」展 ～本学、北駕文庫所蔵古文書より～

仏教

- ①. 融通大念佛本縁起 (ゆうずうだいねんぶつほんえんぎ) 2巻2冊 別書名：融通念佛縁起 著者：融観 成立：元禄4 (1691)、天保3 (1832) 版
融通念佛宗の開祖、良忍 (1073～1132) の伝記にあわせて融通念佛を感得した由来、日本の神仏の結縁、道俗への念仏勧進、没後の奇跡、念仏の功德・利益などを描いた絵巻。
- ②. 融通念佛縁起絵 (ゆうずうねんぶつえんぎず) 2巻2冊 上記の絵巻を巻物にしたものか。
- ③. 十七憲法和解 原著：十七条憲法 原著者：聖徳太子 (574～622) 成立：推古12 (604) 注釈者：雪堂居士述 明治22 (1889) 冠位十二階を定めて、忠勤を励まし、政府の秩序を正すべく、17条より成る憲法を定めて、政府の指針を与えた。仏教の公的受容が宣言された。
- ④. 黒谷 法然上人一代記 (くろだに ほうねんしょうにんいちだいぎ) 10巻10冊 寛文6 (1666) 浄土宗の開祖、法然 (1133～1212) の一代記。
- ⑤. 梵語千字文 (ほんごせんじもん) 京都書舗 額田正三郎 安永2 (1773)
- ⑥. 悉曇梵語 (しつたんほんご) 元禄7 (1694) 悉曇とは梵字の字母。また、インドの音声に関する事柄の総称。
- ⑦. 道神足無極変化経 巻第四
- ⑧. 一切経音義 巻十四ノ五 (第五十六巻) 玄奘 (げんじょう) (=三蔵法師) (602～664) 訳
- ⑨. 妙法蓮華経 巻第七
- ⑩. 融通念佛縁起絵 下巻 前出1、2参照
- ⑪. 南都大仏殿御縁起 (なんとだいぶつでんごえんぎ) 別書名：東大寺大仏殿縁起 著者：竜松院崇憲 天明3 (1783) 南都とは奈良のこと。大仏殿建立記。
- ⑫. 身延鑑 (みのぶかがみ) 新板増補 別書名：身延山根元記 著者：白亮 成立：貞享2

(1685)、宝暦12 (1762) 版 日蓮宗開祖、日蓮 (1882～1942) の法語集。白亮は弟子。

- ⑬. 歎異鈔 (たんにしょう) 著者：唯円? 浄土真宗の開祖、親鸞 (1173～1262) の法語と没後の異端を嘆いた書。唯円は弟子。
- ⑭. 観音経御詠歌略註 (かんのんきょうごえいかりやくちゅう) 著者：山田意斎 成立：嘉永2 (1849) 初版
- ⑮. 合鏡 (あわせかがみ) 3巻3冊 別書名：安者世鏡、異理和理合鏡 著者：増穂残口 成立：正徳6 (1712)、享保4 (1719) 版
- ⑯. 日光山三社瀧尾霊託記 (にっこうさんさんじゃたきおれいたくき) 別書名：日光山滝尾霊託記 著者：叡岳大僧正覚深述、護法城蔵板 万延1 (1860) 本学のみ所蔵
- ⑰. 仏像図彙 (ぶつぞうずい) 増補諸宗 5巻5冊 著者：土佐秀信画 成立：天明3 (1783)
- ⑱. 當曼荼羅略書 (とうまんだらりやくしょ) 2巻2冊 著者：覚超? 天台宗書。
- ⑲. 高僧法帳 (こうそうほうじょう) 別書名：高僧帳 駒込願行寺蔵 写：田中充 善導大師、円光大師等高僧の書道真跡集。

神道

- ⑳. 神事略式 (しんじりやくしき) 明起元戊辰11月 神事祭祀の書。本学のみ所蔵
- ㉑. 神家要術付録 (しんかようじゅつ) 著者：武居重矩 (たけいしげのり) 信濃国木曾谷三富野駅産社 享保13 (1728)
- ㉒. 中臣大祓図絵 (なかとみのおおほらえず) 3巻3冊 著者：蓬室有常、松川半山画 成立：嘉永5 (1852)、嘉永5版 神道の書。

他41冊

【参考書】

国書総目録 増訂版 全8巻 岩波書店 初版1963 増訂版 1989
岩波 仏教辞典 中村元他編 岩波書店 1989
総解説 仏教経典の世界 自由国民社 1992
分類 183 B 87

パーク・シティに住む「スキーの王様」と「ネズミ学会」

竹内 潔

12月、札幌は50年振りの大雪という。道路を隔てた、大きな松に飾り付けられた白と緑の電球が、今もゆっくりと、しかししみそうな気配すらない雪片を微妙に輝かせている。ボストンの郊外、ニュートンに住んでいた当時の、同じ様な雪の夜を思い出した。その日、夕方から途切れることなく降り続いた雪は、夕食が終わるころまでに、ちょうど長靴が隠れる程まで積もった。飾り付けの済んだ近所のクリスマス・ツリーが、窓越しに見えている。この辺りは、高級レジデント・エリアと呼ばれ、ユダヤ系の医者、弁護士、実業家などの実に立派な家が多い。勾配のきつい坂に4つの足跡をゆっくりと残しながら、すでに一時間は歩いている。坂の途中にある、ヘレンケラーが学んだことで有名な盲学校を過ぎ、道沿いのクリスマス・ツリーをすでに20は批評したであろう。その夜は、そのまま雪の道を歩き続け、閉店前のスキー・ショップに飛び込んだ。実は、目前に迫ったパーク・シティへのスキー旅行の準備の夜でもあった。

アメリカ動物遺伝生化学会がアメリカ、ユタ州、パーク・シティで開催された。この学会には、主にネズミを実験材料として使い、人間の遺伝病等を研究している研究者が参加している。学会のボスは、地球上のネズミをほぼ全種類保持しているジャクソン遺伝研究所の所長である、ケン・ペーゲン博士、ニューヨーク州立ガン研究所生物遺伝学部長のバーン・チャップマン博士である。学会は、夕方から夜にかけて開催され、午前中、午後の大部分はスキーに出かけられる。そのため、スキーと研究が趣味という研究者が一同に介する。学会も確かに大事だが、私には、この地でどうしても、会ってみたい人物がいた。King of Ski、ノルウエー生まれのスタイン・エリクセンがこう呼ばれていたのは、随分と昔のことである。当時、スキー界ではノルデック王国として君臨していたノルウェーに、スタイン・エリクセンはアルペンスキーの新星としてデビューした。オリンピックでの活躍ばかりではなく、彼独特の華麗なスキースタイルは、多くの人を魅了した。その彼をスキー雑誌で見たのは、私が中学生の時だった。その当時、アルペンスキーに熱中しており新しい技術、道具等、手にはいる情報には貪欲だった。世界の大きさを知らなかったとはいえ、基礎スキーの技術は全てマスターしており新技術の開発を目指すことが恰も使命のように思っていたと記憶する。

雑誌の中で、スキーの王様、スタイン・エリクセンの「マンボ・ターン」の紹介という記事を眼にしたのが彼を知るキッカケだった。このターンは、オーストリアスキーと呼ばれるスタイルが全盛だった日本では、まったく異質のスキー操作で、2本のスキーのターンの内エッジで雪面をとらえ続けターンを完了するという、一昔前に流行ったフランススタイルとも異なる独特のターンで、十分に「遊び心」を満足させてくれた。このマンボ・ターンの元祖がスタイン・エリクセンだった。彼は、パーク・シティに隣接したデア・バレーでスキー学校を経営する傍ら、パーク・シティでスキーショップを持っている。日本にも何度か来日した彼は、当時スキービジネスで日本に旅行しており私の滞在中に会うことはできなかった。憧れのパーク・シティは、最大滑降距離4マイルほどあり、山の頂上から技術レベルにあった滑降コースを選びながら、長い時間をかけて存分に楽しめるコースが準備されている。また、アメリカ・ナショナルチームの公式練習場でもあり、常に世界のトップスキーヤーを目のあたりに出来る場所でもある。勿論クロスカントリースキーのためのコース、フリースタイル練習コースも充分準備されている。ロバート・レッドフォードが毎年12月に主催する世界的な映画祭もこの町で行われ、スキーシーズンの到来を告げる大きな行事の一つになっている。

昨年秋、電子メールで訃報が飛び込んできた。長い間の共同研究者だったバーン・チャップマン博士が、日本訪問中に亡くなった。「ネズミ学会」の主催者の一人で、世界的な遺伝学者であり、アメリカで得た最も親しい友人の一人であり、家族ぐるみの付き合いだった。12月の雪の夜、今年の挨拶には、パーク・シティの学会発表で使った、手書きの「グリーンネズミ」を書くことにした。(たけうち きよし 北海学園大学人文学部教授)



パークシティスキー場にて

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.17 No.4 (通巻136号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎ (011) 841-1161 本館内線 270~275・279 工学部内線 813・814 印刷所: (株)アイワード